

再検討「江戸無血開城」特に「静岡会談」はどのように語られてきたか、その「功労者」は、今後はどのように語られるべきか。

岩下 哲典

はじめに

まず、「江戸無血開城」とは何か、から述べたいと思う。

慶応四年一月三日、京都郊外で鳥羽伏見の戦いが勃発した。大坂城の徳川慶喜が派遣した旧幕府・会津・桑名連合軍（以下、旧幕軍）と薩摩・長州連合軍の戦いが始まった。旧幕軍の敗北を耳にし、かつ「官軍」を示す錦旗が翻ったことで慶喜は、六日、戦線離脱し、七日朝大坂湾の開陽丸に乗船し、一二日江戸城にもどった。江戸城内では、抗戦か恭順かで意見が分裂した。小栗忠順ら抗戦派に対し大久保忠寛・勝海舟、高橋泥舟らが恭順を唱え、二三日には恭順派が優勢となりつつあった。その間、新政府の、朝敵慶喜追討の命を受けた大総督府は静岡（当時は駿府、以後、可能な限り静岡で統一）へ進出した（三月六日）。これには、徳川譜代の彦根・大垣藩の新政府出仕や徳川御三家筆頭の尾張藩による東海・信濃の諸藩・旗本・寺社等への勤王誘引活動が与って力があつた。一方、慶喜救解活動も活発になり、静寛院宮（和宮）および天璋院（篤姫）の使者、一橋茂徳、上野輪王寺宮（公現法親王）が使者に立ち、また、慶喜の命を受けた山岡鉄舟が派遣された。三月九日、大総督府参謀西郷隆盛に静岡で江戸徳川家（以下、徳川家）側代表者としてはじめて会見すること

ができた山岡は、慶喜恭順の実情を述べた（「静岡会談」）。山岡・西郷の「静岡会談」で、新政府の、降伏五箇条の条件（内容は後述）が初めて、徳川家側に提示され、その五箇条のうちの四箇条を山岡は了承した。しかし慶喜の処遇一箇条だけは保留にして江戸に戻って来たのである。まさに「静岡会談」が重要なターニング・ポイントになっている。「静岡会談」の結果、四箇条の追認と残った問題を交渉し解決するため、山岡・勝海舟と西郷の「江戸会談」が、三月一三・一四日に行われた。かくして、西郷本人が京都に赴くことによって、静岡・江戸会談の成果が、同月二〇日、京都会議で決定された。これにより「江戸無血開城」は正式決定され、四月四日に勅使が江戸に入城し、同月一日未明、慶喜は江戸上野寛永寺を出立し、同じ日に、尾張藩が江戸城を受け取り、「江戸無血開城」が名実ともに完了したのである。同月一五日慶喜は水戸に着き、弘道館で謹慎するが、五月一五日には、山岡や勝の説得空しく旧幕臣（徳川家家臣の意、以下同）の彰義隊と新政府軍の上野戦争が勃発した。しかし一日で彰義隊は敗北して決着した。同月二四日には徳川家は、駿河府中七十万石で江戸から駿府城に移ることが公表された。これは、その後の長岡城や会津城攻防戦である長岡戦争・会津戦争、特に会津戦争直前の新政府のかたくな態度とその後の展開、結果などと比較して明らかに「寛典」ではないだろうか。この点でも、「江戸無血開城」は幕末維新史上の画期的出来事であった。こうしてみると、やはり、「静岡会談」が最も重要な会議であったことが理解される。

そうした上で、「江戸無血開城」の真の「功労者」は誰かを考えてみよう。新政府側は西郷であることはほとんど議論の余地はないように思える。では徳川家側はといえば、いまだに勝が、最大の功労者とすることが多いように思う。しかし、後に述べるように、従来言われていることは異なり、徳川家側は、山岡が第一番であり、かつまた、高橋の役割も忘れられている。どうしても勝の役割が過大視されていると考えざるを得ない。やはり、聖徳記念絵画館の絵画「江戸開城談判」（結城素明画、昭和一二年公表）には西郷と勝しか描かれておらず、それが「江戸無血開城」の挿絵として、歴史教科書をはじめ、ほとんどのメディアに登場し、勝・西郷の「両雄の会見」で「江戸無血開城」がなされたことを印象

付けていることが大きな原因の一つである。イメージ先行で、「江戸無血開城」が語られるのは大いに慎むべきかと思う。それはさておき、旧幕臣や譜代大名にとって「江戸無血開城」は、ある意味、最大の屈辱であった。なぜなら、盤石と思われていた將軍の城、江戸城が、直接の受取は御三家尾張藩とはいえ、関ヶ原で敗北した外様大名を中心とした新政府軍に接収されてしまったからである。すなわち、旧幕臣や譜代大名のアイデンティティの源泉であるところの江戸城が、失われたからである。それは、単に生活基盤の喪失ではなく、心の中に穴の開いた状態、大きな喪失感（「江戸城ロス」）をもたらし、社会の大きな不安定要因ともなりうるものであった。ここに、新政府にとって慶喜と旧幕臣と新政府に敵対的な譜代大名をどうするか、慶喜とその側近たちにとって、そのような旧幕臣と譜代大名をどうするか、という共通の問題が生じたのである。この時、新政府と慶喜とその側近は運命共同体となったのである。これは、ある意味、新政府に慶喜の恭順が認められ、新政府側に慶喜とその側近が取り込まれたということも出来よう。

そもそも、新政府内の討幕を主張する勢力の大きな目標は、鳥羽伏見の戦争責任の問責、すなわち慶喜の処分であった。それが慶喜の助命と「江戸無血開城」で、その目標は喪失してしまったのである。これにより、もともと戦争勝利後、想定していた戦後、占領地を恩賞とする論功行賞が行えなくなったことから、新政府内部討幕派や実際に参陣した者たちの不満が増大していた可能性が大である。彼らは、戦争を希求していたのである。

一方、関東周辺部の不穏な状況から、市川や宇都宮で戦争が起き、奥羽越列藩同盟が結成され、東北・北陸でも暗雲が立ち込めた。かくして大規模な戦いでは長岡戦争・会津戦争・箱館戦争が勃発する。これらの戦争遂行上、江戸はその前進基地となった。こうした点でも「江戸無血開城」の歴史的意義は大きい。

また、江戸の庶民にとつては、「江戸無血開城」は、まさに驚天動地であった。「公方様の御膝下」を自負していた江戸庶民は、最初は、薩長等への嫌悪もあつたかもしれないが、次第に歓迎して、あるいはせざるをえなくなった。それは、庶民的生活優先の生き方がそうさせたものだろう。安寧な生活をおくること、それが庶民のささやかな願いであり、それ

が平和裏の東京奠都をもたらし、「明治日本の始まり」となった。それが、また「近代日本」、「日本の近代化」をもたらしたともいえる。

以上のように考えてみると、「江戸無血開城」の真の功労者は誰かという問題は、なかなかゆるがせにできない問題である。西郷隆盛だけなのか、新政府の他の人間にもスポットを当てていくべきなのかもしれないし、山岡鉄舟、高橋泥舟、勝海舟や大久保忠寛、徳川慶喜、さらにはその他の旧幕臣の中にも知られざる功労者がいるかもしれない。そうしたことも考慮に入れながら、今回は特に山岡・西郷の「静岡会談」に焦点をあてて「江戸無血開城」のなかで最も重要な「静岡課会談」がどのように語られてきたか、そして、「静岡会談」と功労者は今後どのように語られるべきかを考えていきたいと思う。

1. 「静岡会談」の研究史とその語られ方

ここでは、三月九日の「静岡会談」がどのように語られてきたかを述べていく。太平洋戦争直前に刊行されたものから最近までの主要な書籍をあげてみたい。学術論文や書籍を中心とするが、一部、学術的な小説も入っている。「江戸無血開城」に関する書籍等、すべてを網羅することは出来ないが、管見の限りである。

なお、刊行年の順番に、主として「静岡会談」の該当箇所を引用し、コメントを付したい。引用中、傍線を施したのは、岩下である。また引用中の（ ）で、岩下の注記の場合は明記した。

維新史料編纂会「戊辰之役」『概観維新史』維新史料事務局、一九四〇年では、「輪王寺宮其の他の嘆願」が行われたが「未だ多く要領を得るに至らなかつた」とし「茲に旧幕府精銳隊頭山岡鉄太郎は挺身徳川氏救解の事にあたらうと決意し、

大総督府参謀西郷吉之助に寄する旧幕府陸軍総裁勝義邦の書を携へ、三月九日駿府に至り、吉之助に会し、具に徳川家の上下恭順の状を陳べて、穩便の処置を請うた。義邦書翰の要旨は（中略、岩下註）。吉之助は鉄太郎の陳情を納れ、大総督宮に稟議して、謝罪の目七箇条を示し、義邦・鉄太郎及び旧幕府若年寄大久保一翁をして、速かに実効を立てることを命じた。其の条件は慶喜の備前藩御預、江戸城の明渡、軍艦・兵器の引渡、旧幕臣の謹慎、江戸の鎮撫等であった。」と記述している。このあと、同十三日吉之助が江戸入り、十四日田町会谈が行われ、慶喜が水戸謹慎が決まり、明日の総攻撃中止されたとする。山岡派遣は述べているものの、山岡の自発的な活動のような印象を受ける書き方である。

同「江戸開城」『維新史』第五卷、一九四一年でも、やはり山岡が「自ら東征大総督府に赴き」としている。そして西郷宛勝書状の七箇条を引用し、また山岡の「談判筆記」を参照しているが、「慶喜の事は吉之助一身に引請けて取計らふべしと答へた。」とする。西郷は「子（山岡）は速やかに帰府して勝義邦・大久保忠寛と協議して謝罪の実を現すべし。余は三月十五日の江戸城進撃の期日以前に江戸に入りて、義邦らと改めて談判を遂げるであらふ。」と描く。そして「勝等は始めて徳川家救解の曙光を認め得て大いに喜んだ」とし、一三日からの交渉や七箇条を再度述べて、「東海・東山二道の両先鋒総督府に遣して、翌日に迫った江戸城進撃の中止を命ぜしめた」、「両雄の会見は吉之助の洪量大度と義邦の胆略とに依つて、其の目的を達し、徳川家は幸いにして滅亡を免れ、江戸百万の市民は兵燹の災禍より救はれるに至った」と最終的には、勝と西郷の「両雄の会見」に収れんしてしまっている。

井上清「統一国家の成立」『日本現代史』Ⅰ、東京大学出版会、一九五一年を見てみる。「山岡鉄太郎がこの手紙（西郷宛勝書状、岩下註）を携えて、駿府に西郷をたずね、九日両者会見、西郷は山岡の説明をきいて、深くその使命を諒とし、直ちに大総督府の決済をえて七カ条の降伏条件を山岡に示した。ついで西郷みずから江戸に入り、勝と会見し、慶喜助命と引きかえに江戸開城その他の妥協案をとげ、十五日と予定されていた江戸城総攻撃は中止された」として、勝と西郷は外圧より内乱を恐れたとも書いている。先行する二書とほぼ同じ内容といえよう。

鷹見安二郎「官軍入城当時の江戸」『市中取締沿革』鷹見本雄、二〇一八年は、初出が『都史紀要』二、東京都、一九五四年なのでここで言及する。鷹見によれば、海舟を派遣する計画があったが、勝が官軍に抑留される恐れがあり「三月五日になって旗本山岡鉄太郎（鉄舟）の申し出を容れ、山岡が勝の手紙を持って当時駿府（静岡）まで進んで来ていた東征軍の参謀西郷吉之助（隆盛）の許に使用することとなった。」とする。事実を正確に述べている。「三月十日山岡はよくその使命を果たし東征大総督府の徳川氏処置の内書を得て帰った。」とし、七箇条で、さらに一三・一四日の江戸会談を述べる。しかし、なぜ勝から山岡なのかという問いがないのが残念である。実際には、勝から高橋、高橋から山岡という順繰りで、最終的に山岡に順番が回ってきたのである（後述）。

松浦玲「山岡鉄舟の役割」『勝海舟』中公新書、一九六八年では、「山岡鉄舟が海舟の手紙をたずさえて江戸を出発したのは、奇しくも、その総攻撃の命令が出された日と同じ三月六日の早朝だった」。「山岡の使いは一応の功（傍点は松浦、岩下註）を奏した。」「西郷は、総督府側の徳川に対する降伏案件を箇条書にして山岡に渡し、持ち帰らせた。」「しかし、この会談の効果は、あくまで東征軍と徳川方との話し合いのい、と、ぐ、ち（同上）がみつかったというだけである。それだけのために、鉄舟の捨て身の行動を必要とする情勢だったのだ。」とした。あくまでも勝を主人公にしている。そしてこのあと、お決まりの両雄会見となる。

原口清「江戸城明渡しの一考察」『戊辰戦争の展開』岩田書院、二〇〇八年は、初出が『名城商学』二二二、一九七二年であるのでここで取り上げる。原口は、「井上清説が、岩下註」新政府や西郷隆盛が『旧体制との妥協』に「転向」したものとみなしているのに対し、私は、それは新政府の基本方針の修正を意味するものではない」とし「これらの他にも、細部にわたれば、さまざまな見解のくいちがいが認められる」とした。そして「慶喜の直命をうけた精鋭隊頭山岡鉄太郎が、勝海舟と打ち合わせたうえ、勝の西郷宛書翰をもち薩摩藩士益満休之助とともに駿府に行き、西郷と会談したのは三月九日」であること、七箇条が妥当であること、「政府側と旧幕府側との正式な談判といった性格のものではなく、山岡

が慶喜の恭順の誠意を訴えることに主眼がある」、「真に徳川方を代表する実力者とは認められなかった。」とする。しかし、なぜ「正式な談判といった性格のものではな」いのか、「(山岡が、岩下註) 真に徳川方を代表する実力者とは認められなかった」のはなぜなのか、根拠を示してはならず、憶測に過ぎない。ただし、原口論文の重要な点は「新政府―大総督府の慶喜降伏条件がはじめて徳川方に明示された」こと、「このことによつて江戸城の平和的明渡しの可能性は強まった」としたところである。この点をさらに追及すべきだったのではないだろうか。やはり一三・一四日の江戸会談に引つ張られた感がある。山岡は条件交渉しているのに正式な使者ではないという論理矛盾が残念である。

石井孝『勝海舟』(人物叢書) 吉川弘文館、一九七四年は、「山岡鉄太郎の駿府派遣」と項目をたて、「徳川政権の実権者となつた海舟がやつた第一の大きな仕事は、山岡鉄太郎(鉄舟)の駿府派遣である。」と述べ、勝を持ち上げ、「慶喜への『言上を経て』実行させたのである。」とする。山岡は勝に派遣されたのではないので、また慶喜に言上したのは高橋なので、事実誤認である。この本は勝海舟伝記の決定版ともいうべき書ではあるが、静岡会談への経緯に関して注意を要する。なお、「山岡が勝の書簡をたずさえ、静岡に行き、七箇条を持つて帰つてきた。すると、「山岡の帰府に接して『諸官驚懼してまたいふ所なし』』という」とした。「諸官驚懼してまたいふ所なし」は状況としてあり得ると思う。こののち、大久保が嘆願書を作成し、勝は山岡に対して冷ややかな対応をしたというのもあり得るかもしれない。

佐々木克『戊辰戦争』中央公論社、一九七七年も戊辰戦争の全体像をつかむのには好著である。その「江戸開城と上野戦争」の部分、「三月六日、勝からこの手紙を託された山岡鉄舟は、九日駿府で西郷と会つた。この山岡・西郷会談で、はじめて政府側の慶喜降伏条件が明らかにされた。」と原口説をとる。条件を要約したあと「この会談の席で山岡は慶喜を備前藩に預けることには絶対に反対であると抗弁したといわれている。もっとも反対したところで、山岡は徳川家の代表者(傍点は佐々木、岩下註)ではなく、勝の使い(同上)であるにすぎないから、それで慶喜の降伏条件が決定するな」といふことではない。」とした。また「山岡を(敵中)に派遣したのは大成功であつた。」としたが、傍線部分は事実とは

認めがたい。山岡は慶喜に派遣されているので、「徳川家の代表者」である。交渉もしている。やはり、「両雄の会見」の呪縛から解放されていないといえよう。

萩原延壽『江戸開城 遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄』朝日新聞社、二〇〇〇年は、初出が、一九八一年である。「江戸開城」で、萩原は、「ところでサトウが江戸に滞在していた一週間はまず山岡鉄太郎（鉄舟）が東征軍の慶喜への降伏条件を駿府から江戸にもちかえり、つづいて山岡の後を追うようにして江戸に来た西郷吉之助（隆盛）と勝義邦（海舟）との間で二度にわたる折衝がおこなわれ、その結果西郷の決断によって、三月十五日（陽暦四月七日）に予定されていた東征軍の江戸総攻撃が延期されることになった時期にあたっている」とし、「これは（慶喜の恭順が真実かどうか、岩下註）まもなく勝の書状を携えて来訪した山岡鉄太郎のことによって、いっそう確実なものになった」として、山岡の業績は認めつつ、「両雄の会見」に収れんする書き方だ。

石井孝『戊辰戦争論』吉川弘文館、一九八四年も戊辰戦争史上欠くべからざる文献ではある。石井は「徳川政権の消滅」のなかで「山岡鉄太郎（鉄舟）が海舟の書簡をたずさえて江戸を出発したのは、あたかも駿府に進出した大総督府で江戸城進撃の期日が決定された三月六日であった。」とし、七箇条や肥後藩士探索書による新説も紹介している。しかしながら、山岡の役割が正当に評価されていない。一三日に木梨・パークス会談が行われたとしているが根拠が希薄である。

小西四郎編『勝海舟のすべて』新人物往来社、一九八五年も勝の研究文献として有益ではあるが、小西の「勝海舟とその時代」では「最後の大事事」「西郷隆盛との会見、江戸無血開城となつて事が解決したことはあまりにも有名」としているにすぎない。また、同書中の神谷次郎「勝海舟関連人名事典」には「山岡鉄舟」が収録され「鉄舟の働きを基にして、海舟と西郷隆盛の江戸城総攻撃と無血入城の対談がスムーズに進められていった。」とする。また釣洋一「勝海舟関係史跡事典」では「山岡鉄太郎の事前工作によって西郷との会談へ見透しをつけていた」とか、光武敏郎「勝海舟年譜」には「三月六日、山岡に手紙を託し江戸を出発さす」と簡単に書かれているだけである。海舟の本だけに仕方がない事ではあ

るが、事実認識に問題があると言わざるを得ない。

勝部真長『勝海舟』上・中・下、PHP研究所、二〇〇九年は、初出が一九九二年である。勝部は「使者・山岡と西郷の談判」で「三月五日、旗本山岡鉄太郎（号・鉄舟）が訪ねてきた。初対面である。」とし山岡の出自・性格などを正確に記述する。そして「高橋（泥舟、岩下註）の推薦で、精銳隊頭・山岡鉄太郎は慶喜からじかに、駿府の大総督府へ、慶喜恭順の趣旨を伝える使者の役を命ぜられた。」とかなり正確に述べる。そのうえ山岡の『談判筆記』全文を掲載している。勝部は、山岡の事蹟をきちんととらえようとしたと思われる。しかし、勝の伝記である本書の中では、勝が「西郷を唸らせた手紙」を書いたこと、「勝負師・海舟の胆略」が勝っていたこと、「幕末明治の難関を切り抜けたものは、この（海舟の）人間学である」として、一三・一四日を「海舟、気合の談判」とし「江戸攻城中止の決断」は勝と西郷がしたとして、やはり「両雄の会見」に持つていく。

これまで明らかになったように、三月一三・一四日の江戸の「両雄の会見」（実際には山岡も参加している）にすべて焦点があてられ、そこから遡る形で、歴史叙述がなされているように思われる。これでは、正確な歴史叙述とはいえないし、歴史学の方法論としても問題があろう。

松尾正人『維新政権』吉川弘文館、一九九五年も、幕末維新史を知るうえの良書である。松尾は「関東の平定」で「勝の書簡を持った腹心の山岡鉄太郎（鉄舟）は、駿府で三月九日に西郷に面会し、慶喜への寛大な処置を願って出ている。その後には勝と西郷は、高輪の薩摩藩邸で数次の会見を行った。」として山岡を評価しているが、山岡は勝の腹心ではない。

岩下哲典『徳川慶喜 その人と時代』岩田書院、一九九九年の「朝敵となる」の中で、「結局、大久保一翁、勝海舟、山岡鉄舟、一橋家当主徳川茂栄、十三代将軍家定夫人天璋院、十四代将軍家茂夫人静寛院宮（和宮）などの尽力で、徳川家の処分が寛大になされた。」として、山岡も登場させた。今となつては「山岡、高橋（泥舟）、大久保、勝、和宮、天璋院、徳川茂徳」という順番にすべきだったと考えており、そのように訂正したい。

佐々木克『江戸が東京になった日』講談社、二〇〇一年を見てみよう。佐々木は「江戸を東京に」で「三月三日には政府軍大総督府参謀、西郷隆盛と江戸徳川家（すでに幕府はない）の最高幹部（陸軍総裁）勝海舟との間で、江戸開城についての話し合いが、江戸三田の薩摩藩邸で行われた。そして四月一日の江戸城の無血開城となった。」とし、静岡会谈や山岡に一切触れていない。

家近良樹『徳川慶喜』幕末維新の個性1、吉川弘文館、二〇〇四年は、「九日には慶喜が派遣した幕臣の山岡鉄太郎（鉄舟）が、やはり駿府に到着し、西郷との会谈がもたれる。そしてこの後すぐに、大総督府から勝海舟・大久保一翁・山岡鉄太郎の三名に対し、慶喜の死一等を減じるための条件が提示される。」として、短いながら静岡会谈や山岡の業績に触れている。

保谷徹『戊辰戦争』吉川弘文館、二〇〇七年は、佐々木、石井以来の戊辰戦争に切り込んだ好著である。保谷は「江戸開城と関東の争乱」で「江戸に迫る東征軍に対し、勝義邦は山岡鉄太郎を使者に立て、大総督府の意向を探った。」として、勝が山岡を使者に立てたとした。また大総督府の意向を探ったとするが、これまで見てきたように事実と異なっている。また山岡の役割は二三・一四日の江戸会谈の前提との扱いである。

辻ミチ子「江戸無血開城」『和宮』ミネルヴァ書房、二〇〇八年は、「江戸無血開城」で「鉄舟は隆盛を相手に演説して、初めて新政府の徳川家処分の具体的な条件を引き出すことに成功していた。それは慶喜の謹慎、江戸開城、海軍の武装解除など七カ条を謝罪条件としたもので、ここで、内々、慶喜の助命と徳川家存続の朝廷の意向が明らかになった。次は海舟の出番である。」として、やはり海舟の活躍の前提扱いとなっている。

竹村英二は、『幕末武士／士族の思想と行為』御茶の水書房、二〇〇八年の『駿府談判筆記』と『覚王院論議記』を武士道の観点から分析した。「山岡の行為はあくまでも不戦にむけた『地均し』」であり「戦闘回避をもつての国の安定と安民の実現」しようとし、ここには「武人性と責任意識の行為化」があるとした。

松浦玲は、大著『勝海舟』筑摩書房、二〇一〇年の「大政奉還から彰義隊戦争まで」で次のように述べる。「西郷は林
玖十郎と打合せた降伏条件を山岡鉄舟に示し、江戸へ持帰らせた。山岡に決定権は無く、大久保一翁と勝安房に相談し、
それで和戦いづれかで決まるだろう」とした。山岡に最終決定権はないのは当然だが、実際五箇条のうち四箇条は決めて
きているので、こうした断定はいかなものか。松浦『勝海舟と西郷隆盛』岩波書店、二〇一一年の「第二回会見と江戸
開城」もほぼ同様で、肯定することはむづかしい。

宮地正人『幕末維新変革史』下、岩波書店、二〇一二年も幕末維新史を理解する上で必読書である。宮地は、「戊辰戦
争（2）」で「西郷は大総督の意見を糺したうえで作成した謝罪条目七カ条を山岡に示したが、その内の慶喜備前藩御預
けの条に関しては、家臣として吞むことは不可能と強硬に抗議、その修正を西郷が請合い山岡は直ちに帰府、勝に経緯を
報ずるのである。」とした。興味深い記述であるが、勝の使いというようなことはなかった。

岩下『高邁なる幕臣 高橋泥舟』教育評論社、二〇一二年で、岩下は「泥舟が慶喜の傍らにいて、その義弟鉄舟が西郷
のもとに行かなければ、慶喜や徳川家の救解は全く困難であった」として、山岡派遣のキャスティングは高橋であったこ
とを主張した。

家近良樹『徳川慶喜』吉川弘文館、二〇一四年で、家近は「帰府後の慶喜」の中で「ついで一橋家当主の徳川茂徳や幕
臣の山岡鉄太郎（鉄舟）・大久保一翁らの尽力もあって、慶喜の最終的な処分が決まるのは、四月四日のことであつた。」
とした。徐々に山岡の業績が知られるようになってきたことがうかがい知れる。

さらに岩下は「幕末維新史と城郭・城下町・武士」『城下町と日本人の心性』岩田書院、二〇一六年で次のように述べた。
「江戸無血開城」は「徳川家もついていたすべての権限・権威を明治新政府が接收した」ことである。この際、旧幕府側
の「功労は鉄舟が第一、ついで泥舟、そして海舟とするのが至当」であるとした。

以上の流れをうけて、森田健司『明治維新という幻想』洋泉社、二〇一六年で森田は、新政府が提示した条件は五箇条

とし、「この山岡・西郷（静岡）会談によって、勝・西郷会談も実現し、江戸城の『無血開城』がなされるのである」「もし、この古武士然とした偉人（泥舟、岩下註）がいなければ、やはり、江戸の町は火の海になっていたことだろう。我々はこのことを、ずっと記憶しておかなくてはならない」とした。

家近良樹『西郷隆盛』ミネルヴァ書房、二〇一七年で家近は「明治初年の西郷隆盛」において、江戸総攻撃中止の三要因は、その一が、天璋院からの書状　その二が、パークスの反対、その三が、勝海舟らの尽力とし、その中に、鉄舟派遣や七箇条処分案が記述される。前著から幾分修正されたが、江戸会談の前提としている点は肯定できない。なお一三日高輪、一四日は田町そばの橋本屋を会談の場所としている点は新しい。

安藤優一郎『西郷隆盛と勝海舟』洋泉社、二〇一七年で安藤は「江戸無血開城の舞台裏」として取り上げる。「（山岡は）海舟からの依頼で、西郷との直接交渉に臨んできたのである。当初は、海舟が直接出向いて西郷と交渉する予定だった。」「そもそも鉄舟が持ち帰った文面だけでは東征軍、つまり西郷の真意はわからない。」「総攻撃は翌日である。この日（十四日）の会談ですべてが決まることになっていた。」「何度も言うが、山岡は勝の使いではない。山岡は、四箇条を呑みできた。静岡会談で多くが決まっていた。安藤説も正確ではない。

三谷博『維新史再考』NHK出版、二〇一七年で、三谷は「戊辰内乱」の中で「慶喜はこれ（三月一三日の軍勢配置）に対し全面恭順を決意した。陸軍総裁の勝に全権を委ね、その勝は駿府の総督府に山岡鉄舟を派遣して、西郷との間に交渉を始めた。総攻撃予定の前日、十四日に勝と西郷は江戸の薩摩下屋敷で会見し、降伏について合意した」として、山岡の派遣を勝によるものとしている。五箇条の内容に触れ、「これらはおかつの幕府による長州処分案に比べ、項目によって軽重に差がある。いずれの場合も重刑を科さない点で寛典だったと言って良いだろう。武力発動をできるだけ回避し、関東平定を速やかに成功させたいという意思が働いていたということが分かる」とする。後半部分は興味深い。

NHK、NHKプロモーション編・刊『NHK大河ドラマ特別展 西郷どん』二〇一八年は、NHK大河ドラマ「西郷

どんSEGDON」にちなんだ展示会の図録である。「江戸開城」の部分はあるものの勝の史料や絵画「江戸開城談判」を掲載して、勝と西郷の業績の顕賞に始終している。山岡の業績に全く触れずに、勝が山岡を描いた掛け軸を掲載している。山岡が「江戸無血開城」において何を為したのか全く書いていない。

木村幸比古『幕末維新伝』淡交社、二〇一八年で、木村は「江戸開城をめぐる交戦」としているが、「交戦」は「交渉」の方が適当かと思う。また「江戸を守る勝と西郷の英断」として、「両雄の会見」に引かれている。そして「勝は（中略）西郷と交渉するため、山岡を使者にたてることにした。」として、勝が山岡を派遣したとする。また「山岡は西郷に謹慎先を水戸に変えるよう申し出た。」として、水戸謹慎が静岡会談の段階で出たとするが、岩下は判断を保留したい。そして「西郷は判断しかね、十五日の総攻撃を延期し、新政府は撤退した。」とするが、どこから撤退したのがよくわからないように思う。

岩下は、二〇一八年に以下の三点を発表した。①『江戸無血開城』吉川弘文館、②『江戸無血開城』徳川家存続『慶喜の助命』の『一番鎗』は、山岡鉄舟である』『西郷隆盛と幕末三舟の書展』、③「忘れていた情報屋の日記と鉄舟直筆『履歴』の記事」『本郷』No.137、吉川弘文館、である。①では、いわゆる「一番鎗書簡」の主要部分の紹介を行い、「江戸無血開城」において、幕府側功労者として山岡が最も功績があったと慶喜自身が認め、公言し、「来国俊の御短刀」を山岡は慶喜から拝領していたことを明らかにした。②では、「一番鎗書簡」の全文を公開した。また、鉄舟直筆「履歴」から、静岡会談では五箇条であったこと、一箇条を保留にしたこと、鉄舟妻英子の「遺言」を紹介し、慶喜から拝領した「国俊短刀」が山岡家家宝の筆頭にあったことを述べた。また、③では、『藤岡屋日記』の「江戸無血開城」関係記事と「履歴」を紹介した。これら①～③をもとに次節を展開する。

最後に、日本史の謎検証委員会『幕末通説のウソ 最新の研究でここまでわかった』彩図社、二〇一九年をあげておく。同書「勝海舟が江戸無血開城の立役者というのはウソ」では、「慶喜に仕えた山岡鉄舟の活躍があったからこそ、江戸は

火の海になることを避けられた。」とあり、山岡の事蹟を短いながらもきちんと述べている。また、「慶喜は高橋泥舟（原註・右 掲載写真の右のこと、岩下註）を交渉役として派遣しようとしていたが、慶喜の身辺警護だったため、代わりに泥舟の義弟鉄舟に白羽の矢が立った。」と挿図説明文ながら、山岡派遣の経緯を正確に書いている。さらに「会談は何度か行われたが、最後の会談は3月9日のこと。勝の会談の4日ほど前には、すでに無血開城の大筋は決まっていたことになる。」とする。「会談は何度か行われたが」が、和宮の使者や輪王寺宮との会談を指すのか不明だが、「勝の会談の4日ほど前には、すでに無血開城の大筋は決まっていたことになる。」とする記述は岩下の見解に近い。ただし、これらは何をもとに書いたのか、巻末に参考文献欄があるが、どれによるのか十分にはわからない。

2. 山岡鉄舟（全生庵所蔵）の史料から幕末三舟・西郷隆盛の役割を探る

これまで知られている、「江戸無血開城」に関する全生庵の史料は山岡直筆の「談判筆記」がほとんど唯一と言ってよかった。全文は圓山牧田・平井正修編『最後のサムライ 山岡鉄舟』、教育評論社、二〇〇七年および実行員会編・刊『西郷隆盛と幕末三舟の書展』、二〇一八年に収録されている。「談判筆記」そのものは、明治一五年（一八八二）三月の成立なので、一五年も前の記憶は信用できないとする者もいるが、誤解もはなはだしい。山岡は、その誠実な人柄で、明治五年に明治天皇の侍従に任命され、宮内少輔にまで上った人物である。「談判筆記」も岩倉具視や三条実美に請われて提出したもので、なかば公的な文書である。また、山岡が世に出ることになったのが「静岡会談」であり、山岡にとっては終生忘れたい事件であったことから、記憶は鮮明であり、その記述はほぼ当時の状況を活写していると考えられる。拙著『江戸無血開城 本当の功労者は誰か？』吉川弘文館、二〇一八年では、「談判筆記」に新たに「一番鎗書簡」（全生庵所蔵）を用いて、「静岡会談」から慶喜が、水戸で謹慎するために江戸を離れる前日すなわち四月一〇日夜の部分を叙述した。

ところで、この「一番鎗書簡」は、二〇一六年八月から九月にかけて、江戸東京博物館で開催された企画展「山岡鉄舟生誕一八〇年記念 山岡鉄舟と江戸無血開城」に展示されたのが、世に広く知られたきっかけである。岩下は、「一番鎗書簡」を見た瞬間、これこそ、山岡が最も功労者であることを示す、最重要史料であることを直感した。展示ケースの前にへばりついて筆写したことを昨日のここのように思い出す。キャプションの詳細は、今ではよく思い出せないが、その展覧会の直前に、日野市立新撰組のふるさと歴史館で製作された図録『特別展幕臣尊攘派』日野市、二〇一六年に掲載されている説明文を見ると、「慶応四年五月」の書状とされていたので、江戸博も「一番鎗書簡」をそのように考えていたのではあるまいか。しかし、この書簡は、同年四月一日以降のものと考えなくてはならない。拙著『江戸無血開城』では、全文翻刻できなかったが、今回「一番鎗書簡」の全文を掲載し、古文書学的に解説したい。あわせて、山岡鉄舟直筆「履歴」と山岡妻英子（高橋泥舟妹）「遺言状」も紹介し、そこから何がわかるのかを述べていく。まず「一番鎗書簡」全文を掲げる。

【A断簡】

- 一 筆申入候、小子事も」十五日御供にて無滞」水戸表へ着、弘道」館と申処二」上様御初御役人、遊撃」隊・精鋭隊
- 一 同人込」罷在候、御安心之事」
- 一、十一日出立前夜」御前へ被召、御手つから」来国俊之御短刀拝」領被 仰付、是迄度々」骨折候官軍之方」へ第
- 一番二参り候事」一番鎗たと」上意有之、あり難」き事二御座候、皆々様」へ御風聴御願申候」
- 一、土浦宿と申す処にて」御代官手付之方（読み仮名…ほを）へ」（以下、断裂）

【B断簡】

のもの巡らの者みつ」け四人にて切捨申候」飛馬吉義もたかひ」勝利を得、御ほめ二相」成候、此段も為御知申上候、」其外、高橋君初二」同（以下、断裂。下線部は見せけち）

「一番鎗書簡」は、A断簡（以下、A）とB断簡（以下、B）の二つに分割されている。刃物で分割されたのではなく、手で引きちぎったことによる切断である。AとBはつながらないので、AとBの間にいくばくかの文字が存在し、またBの後にもつづきの文字があったと考えられる。おそらく、Bには月日の日付、差出である山岡の氏名（「鉄太郎」と宛所（山岡妻英子の名前、「おふさ殿）」が記された部分もあったと思われる。現在確認できるのは、AとBのみである。

Aの原文は「一筆申し上げます。自分は、一五日（四月一五日）慶喜公の御供で無事に水戸に着きました。弘道館というところに、慶喜公初め諸役人、遊撃隊・精鋭隊一同、入りました。安心してください」と訳せる。遊撃隊の頭は高橋、精鋭隊頭は山岡である。

Aの最初の「一つ書」を訳してみよう。「二一日（四月一一日）の出立前夜、すなわち、一〇日、慶喜公の御前に呼び出され、慶喜公より、来国俊の御短刀拝領を命じられました。そしてこれまで度々、骨を折ってもらった官軍の方へ第一番に到達したのは、そなた山岡であり、それこそ一番鎗だとの上意があった。じつにありがたきことで、家族の皆へぜひ御吹聴を御願いたい」。本来慶喜は、二一日前日の一〇日朝に江戸を立出する筈であった。体調不良を理由に一日先延ばしにして、新政府の許可を得ていた。その一〇日の夜、山岡はじめ主だった者を集め、世話になったと労い、おのおの褒美を取らせたのである。その席で、最初に官軍に到達した「一番鎗」の功名は、山岡だと慶喜が確かに認めたのである。褒美の品は来国俊の短刀、慶喜の所用であろう。これに山岡は感激し、「皆へぜひ御吹聴を御願いたい」と書く。吹聴の対象は、やはり家族であろう。したがって、本書簡は、英子宛てのものであったとの推測は十分許されるであろう。

来国俊は、鎌倉後期の名工である。来は高麗から渡来したための姓だといわれる。来国行の子が国俊で、正応三年（二二九〇）から元亨元年（一二三二）までの銘が知られる。深井雅海『刀剣と格付け』吉川弘文館、二〇一八年によれば、將軍の刀としては、中の上と考えられ、江戸最後の夜に、慶喜が臣下に下賜するものの中では、最高級品であろう。同じ日に勝も御刀を拝領しているが、勝は銘を記さない（「此夜 思召しを以て御刀拝領。」勝部真長ほか編『勝海舟全集』一九、勁草書房、一九七三年）。おそらく無銘であろう。勝部真長『勝海舟』PHP研究所、二〇〇九年には「青江弘次」の短刀とするが、明確な根拠を欠いている。青江の根拠は何か、ぜひ知りたいものである。

Aの最後の「一つ書」は、「土浦宿という所で、御代官手付の方（ほう）へ」で終わっていて、AとBとの間に一行か二行あって「のもの、巡羅の者が見つけ、四人で切り捨てました。小野飛馬吉（山岡実弟）も戦い、勝利を得ました。これも、慶喜公から御ほめにあずかりました。このことも御知らせとして申し上げます。そのほか、高橋君（泥舟）初一」同の者は元気ですとでも書いてあったのだろう。ここに記された土浦宿の事件は、拙著『江戸無血開城』でも取り上げますが、代官の手付同士が仲間割れを起こし刃傷事件を生じせしめた一件である。そのうちの一人が土浦宿に出没し、小野達に切りかかって来たため、打ち果たしたものである。慶応四年四月一三日の事件であった。ここからも、本書簡が、慶応四年四月一五日かそれ以降のものであることは明らかである。

この書簡の最大の意義は、四月一〇日当時、謹慎中とはいえ、旧幕府、すなわち徳川宗家の最高権力者慶喜が、山岡を「一番鎗」と認め、感謝し褒賞していたことである。このことは、どのようなことよりも重大で、もつとも重く受け止めるべきであろう。ここからしても、勝が一番の功労者ではないことは火を見るよりも明らかである。たとえば、慶喜が勝を「千両箱」と評価しているようにとも、である（慶応四年三月四日付大久保忠寛宛て慶喜直筆書簡、大田区立勝海舟記念館所蔵。なお、本書簡は、同館の凶録『勝海舟』二〇一九年では大久保忠寛の写としているが、慶喜の直筆の花押があり慶喜の直筆書簡である）。むしろ、慶喜はこうしたレットテル貼りの評価を好んでいたようにも思われる。

では次に山岡直筆の「履歷」（全生庵所蔵）を紹介しよう。これは、明治二年五月に、恐らく宮内省に提出した山岡の履歷書の控えであると思われる。これもきわめて信憑性の高い史料である。「静岡会談」関係部分を抽出する。「同月」は慶応四年三月である。

一、同月総督ノ宮、駿府滞城中、東西隔絶、言路梗塞致シ、慶喜謹慎ノ衷情、上建ニ由ナク、同九日、駿府ニ至リ、参謀西郷隆盛（当時吉之助）ニ見エ、反復論難致シ、慶喜ノ衷情ヲ轍シ、御征東ノ師ヲ停メラレ尋テ、立効トシテ、五箇条ノ御沙汰書ヲ蒙候、右五ヶ条ノ内、旧主ノ一条ハ、君臣情誼ノ忍フヘキニアラサレバ、痛ク隆盛ニ論シ、寛仁ノ命ヲ仰キ、四箇条ノ朝命書ヲ奉戴、帰府致候事

（中略）

一、四月十日、慶喜謹慎ノ衷情、朝廷ニ貫徹セシハ精誠ノ致ストコロ感泣ノ至リニ堪

ユザル段申聞、来国俊ノ短刀授与相成候事

その意味するところは、三月のこと、大総督宮有栖川熾仁親王が、駿府城に滞城中、「東西隔絶」、すなわち京都新政府と江戸の徳川家が断絶して、言路がふさがれていた。そのような状況下、慶喜の謹慎の真情を京都に上申しようにも手段がなかった。同月九日、山岡が駿府に至って、参謀西郷隆盛、当時吉之助に謁見し、何度も何度も議論し、慶喜の謹慎・恭順の真情を徹底的に話すことができた。これにより御征東の師、すなわち江戸総攻撃を中止してもらい、その証拠として、五箇条の「御沙汰書」（大総督宮の命令書）を頂戴した。それを読んで、その五箇条の内、「旧主ノ一条」すなわち、「談判筆記」によれば慶喜を備前池田家に預ける件は、「君臣情誼ノ忍フヘキニアラサレバ」、つまり臣下が主君の処遇を決めるなど以てのほかのことなので、痛烈に隆盛に論難して、「寛仁ノ命」を戴き、四箇条の「朝命書」を戴きたてまつり、

帰府を致した事であるとある。

ほぼ「談判筆記」と重なる。さらに、ここからすると、山岡に新政府側の条件が示されたのみならず、山岡はすっかり交渉を行い、慶喜の処遇を保留にしているのである。これは、「静岡会談」の成果として最も重要なことである。この慶喜処遇条件を呑んでしまったら、以後の交渉の余地は全くなくなるからである。この際、朝敵である慶喜の処遇が最も重要で、その他の条件、すなわち「談判筆記」に記された、江戸城明け渡し、旗本等は向島に移ること、城内の兵器の引き渡し、軍艦の引き渡しは、降伏に付随する、なかば実務的な事後処理問題で、慶喜の処遇に比べれば比較的軽いものである。要するに、一三・一四日の会談は、もつとも重要な案件として山岡が保留にしてきた問題を話し合う会談だったのである。その点でいえば「江戸会談」も重要と言えは重要であるが、すでに優先すべきもつとも重要な慶喜の助命は自明のごとくになっていた。さらに江戸会談によって慶喜の水戸謹慎という軽い処分で済んだのは、山岡が交渉の余地を残して来たからで、結果的には、山岡が勝や大久保に花道をつくってやったことになるのである。山岡は「一番鎗」であるが、手柄を独り占めするのではなく、手柄を分け合うこともしたのである。それゆえに慶喜は、四月一〇日、「自分の謹慎の心からの気持ちだが、朝廷に通じたのは、山岡の精誠の致すところである」と「感泣の至りに耐えることが出来ない」と話し、「来国俊ノ短刀」を授与したのである。このように山岡直筆の「履歴」からも「静岡会談」の重要性、山岡の抜群の貢献度が、十分に推し量られるのである。

そして、全生庵に所蔵される、英子「遺言」の筆頭には「国俊短刀」が書き上げられている。山岡家の家宝の筆頭は、四月一〇日に慶喜から「一番鎗だ」と称賛されて拝領した来国俊の短刀だったのである。現在、来国俊の短刀は、全生庵の山岡家関係資料群には存在しないとされる。山岡拝領の国俊は今、どこにあるのか、是非知りたいものである。なお「遺言」は、明治二一年に記され、同三三年に追記がなされている。少なくとも明治三三年に英子が亡くなるまでは、山岡家には「国俊短刀」は確かに存在したと言って良いだろう。山岡子爵家の第一の家宝は来国俊の短刀だったのである。山

岡の後を継いで、子爵になったのは長男の直紀であった。直紀に関して、勝が、「山岡にもよわるよ。(中略)直紀は、ワシの方へ来て困るよ。モウ切つてあるのだが、まだ来て困るよ。」(『新訂 海舟座談』岩波文庫、一九八三年)と言っている。すなわち、直紀が海舟の所に無心に来ることを困りごととしているのだが、直紀も何も持たずに無心には行かないのではあるまいか。山岡家の家宝を持ち出し、勝から金員を引き出したのではあるまいか。さすれば、来国俊も勝が買った可能性もなくはない。勝ほど、この下賜品「国俊短刀」の歴史的価値を知っている人間は、山岡以外ではないと思われる。これ以上憶測を重ねるのは、やめておくが、山岡家の来国俊の短刀がどうなったのかは重要な課題であることは間違いない。

おわりに 「江戸無血開城」はどのように語られるべきか

では、最後に「江戸無血開城」における功労者を考えてみよう。既にこれまでの検討から、徳川家側の第一の功労者は、山岡鉄舟であることは明らかであろう。何より山岡は慶喜から「一番鎗」と称賛されている。これはもう今後ほとんど揺るがない事実であろう。山岡は、精鋭隊頭として水戸まで慶喜の護衛を行い、さらに彰義隊による戦争を阻止するため尽力する。徳川家の静岡移住に従い、静岡に居住し、静岡藩権大参事を勤め、旧幕臣の生活安定に心を砕いた。後に新政府から茨城県参事や伊万里県権令に任命された。その後、明治五年(一八七二)明治天皇の侍従に任命された。これは、西郷の推薦と岩倉、三条の賛同があつてこそのことである。殊に西郷が、「静岡会談」での山岡の、敵地に乗り込む豪胆さ、粘り強い交渉能力、正論を堂々と述べ、それでいて誠実な人柄、なによりも公正無私な態度にほれ込んだのだと考えられる。それは明治天皇も同じで、山岡は侍従長、宮内少輔にまでなり、山岡が自身で奉公の年限を一〇年とした明治一五年に退職するが、天皇から御用掛に請われ、明治二一年に死去するまでその任にあつた。山岡自身が言っているように、

「江戸無血開城」の「静岡会談」が、山岡出世の糸口なのであった。それまで山岡は、大久保や勝から、部屋住み旗本にして、また、単なる乱暴者としか認識されず、ほとんど無名に近かった。それでは、誰が、そんな山岡を慶喜に推薦したのか。

遊撃隊頭義兄高橋泥舟である。もともと、慶喜の側近くで警備を担当していた鎗の名人高橋が静岡に行つて交渉する予定であった。もっと言えば、その前は勝が行くはずだった（前掲、海舟記念館の慶喜直筆書簡を添付した本紙、すなわち慶応四年三月四日付勝宛大久保忠寛書簡）。勝は「千両箱」だから、最後の切り札だとして慶喜自身が取りやめさせたのが三月四日、勝の代わりに行くことになったのが高橋であった。ところが、慶喜が心変りをして、高橋が自分の側から居なくなると不安だと思ひだし、誰かいないか、と高橋にもちかけた。高橋は、剣の達人にして胆力にも優れた至誠の人、義弟山岡を推薦した。山岡は、慶喜から直々に依頼され、静岡に赴いたのである。何度も言うが、勝の使いではなく、慶喜から任命された徳川家の正式な使者である。山岡は、慶喜から任命された直後、勝邸に赴き、西郷への紹介を頼み、勝の書状をもらい、また、勝は山岡の人となりを初めて知つて、西郷宛書状を書いて与え、預かっていた薩摩人益満休之助を山岡の家に向かわせたのであった。それらのことは「談判筆記」に鮮明に書かれている。

しかし、山岡の「談判筆記」には、高橋が山岡を推薦したあたりの事情が意図的に省略されている。なぜなら、明治一五年当時、二君に仕えずと東京の片隅で隠棲していた高橋に明治政府に出仕の話しなどが舞込んだら、高橋に迷惑がかかる。山岡が考えたからである。或いは高橋が削除させたとも思われる。とにかく、山岡のキャスティングは高橋であった。勝は三月五日、突然自宅を訪ねてきた山岡に初めて会つたのだから、繰り返しになるが、勝の使者ではないのは明らかである。かくして、高橋の推薦で、慶喜の使者山岡が派遣されて第一の功勞者になったのだから、功勞の第二は高橋である。高橋も遊撃隊頭として慶喜を護衛し、その後、江戸で、実に困難を極めた旧幕臣の静岡移住事務を行いそれを完遂した。静岡藩では、田中城を預かり田中奉行、田中勤番組之頭として、山岡と同じく旧幕臣の生活安定に心を砕いた。明

治四年の廃藩置県後は、東京に戻り、しかし一切の公職に就かず、無役で過ごし、世には出ず、文書の清書や揮毫のみで糊口を糊したのであった。おそらく、この生き方は慶喜に恭順を勧め、上野寛永寺に隠居させた際に慶喜と約束したと無縁ではなかったのではないかと思われる。そして明治三五年、慶喜が公爵に叙された祝賀会で唯一、高橋が作った和歌が戸山陸軍軍楽隊によって披露された。慶喜は気に入って二度演奏させたことから、おそらくもとは慶喜が高橋に所望して作らせたものであろう。高橋は和歌の名人でもあったのだ。そして、慶喜の高橋への絶対的な信頼が垣間見える。慶喜が江戸城を出て寛永寺大慈院に謹慎したのも高橋が側近として始終警固したからであらうし、高橋の説得に従ったものと考えられる。慶喜の謹慎・助命・嘆願にも関与し、山岡を推薦した功績は大きく、「江戸無血開城」における功労は山岡に次ぐものと考えらえる。

そして勝海舟であるが、勝は、蘭学者といわれるが巷間言われているほどの学問的業績がない。それゆえ、いつの段階でも政治的業績を積むことを目指したのである。学者としては中途半端で、ほとんど業績らしい業績がないといえる。反面、弟子と言うか、取りまきというか、そうした者は多く、かつ、人望と野心は大いにあった。そして、「江戸無血開城」では、慶喜から最後の切り札とされていたが、結果的には切り札になれなかった男である。山岡が静岡から復命した時、もっとも驚き悔しかったのは勝であらう。山岡も失敗に終わり、自らが滴を持って行おうとしたことを、いとも簡単に、実際には相当な艱難辛苦であったが、傍目には簡単にみえたと思われるが、簡単に山岡に成し遂げられてしまったからである。それゆえ、山岡が明治二年に亡くなってからは勝の独壇場となった。高橋は世に出ないことはわかっていたからなおさらだ。勝の言説にいても簡単に、実に多くの人々が乗せられてしまったかは、本稿前段を読んだ読者はよくお分かりであらう。それに拍車をかけたのが昭和十一年の結城素明描くところの絵画「江戸開城談判」（聖徳記念絵画館所蔵）である。もちろん勝も、明治初期は旧幕臣の鎮撫や旧幕臣の生活支援に邁進した。旧幕臣川村清雄は勝の支援がなければ画家にはなれなかったであらう。明治期も宮中に山岡がいて、表には、海軍少輔、参議、海軍卿や元老院議員、さらに枢

密顧問官に任命された勝がいて、旧幕臣の経済的・精神的な支えになっていたことは確かである。また山岡が「静岡会談」で保留してきた慶喜の処遇を西郷と山岡との三月一三・一四日江戸会談において実質的に決めたのは、勝である。その点は重要である。ただし、徳川家の真の代表だったかどうかは疑問の余地がある。格的には大久保忠寛ではなかったかとも考えられるからだ。両日、大久保も江戸薩摩邸の会談に参加した可能性もある。

ところで、四月一〇日夜の江戸における慶喜最後の夜の状況が、詳細にわかれば「江戸無血開城」における功労を考慮するためには一番よいが、今は史料が「一番鎗書簡」しかなく、慶喜が山岡に声掛けし国俊短刀を下賜したことは本稿で述べた通りである。ただし、現時点で考えうる当夜の具体的状況は、「一番鎗書簡」や「海舟日記」（前出『勝海舟全集』一一）「解難録」（同、一九）などを読み解くと下記のようなものではなかったかと思う。読者の御叱正を得たく思う。

一〇日夜、大慈院での公式謁見で、慶喜は、山岡はじめ会集した皆に一樣に声掛けした。すなわちこれまでの尽力に礼を述べ、そして別れを告げた。その後、席を変えて、世話になった主だった者呼び寄せ、篤く礼を述べ、まず第一に「山岡、お前が一番槍である」と言つて、山岡に短刀「来国俊」を自ら与えた。次に高橋、大久保・勝の順に声掛けと下賜品をそれぞれ与えた。その後、最終的な打ち合わせを、山岡・高橋・大久保・勝などへ行つた際、それまでの儀式で疲労し、かつ、一〇日朝出発予定を病気により一日延ばしていて病がちでもあった慶喜は、以前からの勝への不審な思い（それは勝の側にもあったが）などもあり、そこであれこれ説明した勝の方針（おそらく彰義隊など新政府に敵対している旧幕府勢力の解散ないしは処罰、すなわち収監などの方針と思われる。また軍隊・艦隊の解散などであろう）が気にいらなかった。そこで、慶喜は「勝、お前のやり方は性急すぎる。もう少しよく考えよ」と言つた。一方、勝は、これまでのいきさつ（慶喜との確執―第二次長州戦争の和平交渉後に慶喜に梯子を外されたことなど、鉄舟の「一番槍」の手柄を奪われたくやしき、この時の慶喜のことばのイヤなど）から「この際、ほかに方法は無いと思ひますよ。だから、自分は責任が持

てないと御役目をお断りしていたんだ。それなのに、やめさせてくれなかったじゃないですか。いまさらどんな深慮があるというのですか」と喧嘩腰になり「もしまだ私にあれこれとお命じになるのであれば、私は私のやるべきことを最後までやらしてもらいます」と捨て台詞を言つて席を立ったのである。

最後に、新政府側の西郷隆盛に関して述べておきたい。有名な「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。この仕末に困る人ならでは、艱難をともにして国家の大業は成し得られぬなり」との西郷の言葉は山岡のこととされている。その通りであろう。ただ、「静岡会談」のあと、戦争に向けていきり立つ新政府軍の兵士たちや新政府の指導者らを説得したのは西郷とその部下たちである。基本的には「江戸無血開城」に関して新政府側では責任は西郷が全てを負うことになった。なぜ、そこまで西郷は山岡に肩入れしたのか。山岡が、旧幕臣として単身で西郷の懐に飛び込んできたからである。西郷にしてみれば、飛び込んでこられたからである。もともと単身で敵地に乗り込むのは西郷のお家芸である。第一次長州戦争で、敵地岩国の吉川氏のもとに飛び込んで長州藩との交渉の糸口をつかんだのが西郷その人であった。その時の西郷は、無私であり至誠であった。同じ思いを持つ人間すなわち鉄舟という男に出会えた喜び、その瞬間、西郷は、全責任を負うしかないと腹をくくつたのであろう。この一件「江戸無血開城」に最後まで保証を与え続けたのは西郷である。山岡を終生信じ続けた西郷は、その後、新政府で、参議、陸軍大将まで上り詰めるが、これまた終生に渡つての死に場所探しの総決算として、明治一〇年、故郷鹿児島島の西南戦争で死んでいった。明治七年三月、前年に下野し、このとき帰郷してしまつていた西郷を心配した明治天皇が山岡を鹿児島島に派遣し、表向きには島津久光の東京召喚を伝達させた。この時、山岡は西郷に会つたが、御互いに説得めいたことは何も語らなかつたとされている。まさに英雄は英雄の思いを知つており、互いに何もいわずともわかつていたのであろう。

なお、「江戸無血開城」時期の関東農村の様相や武士が「城」や「武器」を失う意味などには今回は言及できなかった。

これらに關しては、今後の課題としたい。

いずれにしても、「江戸無血開城」、旧幕府側最大の功労者、「一番鎗」は、徳川慶喜本人が認定していることから、山岡鉄舟であると今後は語られるべきである。あえて何度も言っておきたいと思う。「江戸無血開城の旧幕府側の最大の功労者は勝海舟ではなく山岡鉄舟である」と。

主な参考文献（編著者五〇音順）

家近良樹『西郷隆盛』ミネルヴァ書房、二〇一七年

岩下哲典編著『徳川慶喜―その人と時代』岩田書院、一九九九年

同『高邁なる幕臣 高橋泥舟』教育評論社、二〇一二年

同ほか編『城下町と日本人の心性』岩田書院、二〇一六年

岩下監修『幕末維新の古文書』柏書房、二〇一七年

岩下『病とむきあう江戸時代』北樹出版、二〇一七年

同『津山藩』現代書館、二〇一七年

同『江戸無血開城』吉川弘文館、二〇一八年

田原昇・小酒井大悟・岡塚章子『士 サムライ』青幻舎、

二〇一九年

尾脇秀和『刀の明治維新』吉川弘文館、二〇一八年

日野市立新選組のふるさと歴史館製作『特別展幕臣尊攘派』日野

市、二〇一六年

深井雅海『刀剣と格付け』吉川弘文館、二〇一八年

圓山牧田・平井正修『最後のサムライ 山岡鉄舟』教育評論社、

二〇〇七年

水野靖夫『勝海舟の罨』毎日ワンス、二〇一八年

宮地正人『歴史のなかの新選組』（岩波現代文庫）岩波書店、

二〇一七年

本林義範『江戸開城一五〇年を迎えて』『全生』第二八号、

二〇一九年

安高啓明監修『勝海舟』大田区立勝海舟記念館、二〇一九年

若杉昌敬『日本の危機を救った山岡鉄舟』、二〇一四年

協力者（五十音順敬称略）…イアン・アーシー、軽部真緒、毛塚

万里、西村優花、服部英昭、平井正修、本林義範、和田勤

付記 本稿は、二〇一九年六月二九日開催の白山史学会大会講演のレジюме・原稿をもとに、その後の知見を含めて作成した。なお、本稿第一章の部分は、当日はレジюмеを配布したのみで、ほとんど言及できなかったことからである。